

国際化への焦点を絞る

国際関係構築を目指すより戦略的なアプローチと、国際化プロセスにおける相互認識と理解の深化に向けた、日独大学機関による呼びかけ

日独の高等教育機関改革に関する東京（2006）とベルリン（2010）における会議を経た後、ドイツ大学学長会議（HRK）とベルリン日独センター（JDZB）は、ケルン大学の協力を得て、日独両国の高等教育機関交流を強化する目標に向かい引き続き尽力している。

2012年10月17日、18日の両日には「日独の大学の国際化。組織、運営、構造」会議がベルリンにおいて共催され、参加者は以下の声明に合意した。

大学は教育研究の中心的機関として、ナレッジ社会発展のための中核的役割を担う。大学は、国家を超えたプレーヤーである。大学は、大学の行うあらゆる業務や活動において、世界の高等教育コミュニティを創造する一員としての自己認識を持たなければならない。今後は国際化された大学のみが社会の期待に応え、グローバル化のプロセスを能動的に形成し、競争力を維持することができることとなろう。

この信念に基づき、日独の大学を率いる者として、我々は以下の目標に向かい尽力する。

- 21世紀の学習、教育、研究の場としての大学を形成してゆくこと。
- 学生と教員のモビリティを高め、責任感あるグローバル市民を育てること。
- グローバル化された世界における個人と社会のニーズに応えるべく、高いクオリティの教育と訓練を施すことにより、現代の（高齢化の進む）ナレッジ社会が抱える課題を克服すること。
- 社会に資する研究を行うこと。

会議参加者はこの脈絡において、組織的な国際化戦略を持続的に発展させることが最重要であるとの見解を得た。日独の大学機関は、すでに組織的な国際化戦略を持ち目標に向かいつつあるか、現在そのような戦略の策定中にある。

会議においては、内部および外部のステークホルダーを関与させてゆく方策、また国際化を計測する手法の持続可能性と質を担保するための方策について議論した。

ドイツ外務省、ドイツ教育研究省、日本大使による、同会議への積極的参加を、参加者は光栄に受けとめ歓迎するものであった。

日独両国においては、国際化に対する政治面での支援は強固であるにしても、両国の若者に対し、国外での学術研究を促すためもっと働きかける必要がある。学士、修士、研究者による国境を越えた相互交流は、ナレッジを生み、これを培い、技術を発展させる上で不可欠であり、また卓越した学術を目指す道を示すものである。

これを背景に、会議参加者は以下の提言を行う。

- 大学機関は、既存のパートナー協定や、客員研究者の交換スキーム、共同研究プロジェクトを、積極的に支援してこれをより良く用いる。
- 日独における大学の国際課は、将来の日独大学間協力を強化し相互理解を図るため、より積極的な役割を担う。
- 日独の大学国際課職員同士の相互学習、共同学習を導入することにより、両国における組織構造の良い例や、国際化プロセスについての相互理解を高める。この目標は、短期的交換プログラム、共同セミナー、夏期講座等を通じて追及する。

参加者は、会議共催機関に対し、これらの目標を追及するための、インフラ面および資金援助の可能性を模索するよう要望した。

ドイツ大学学長会議およびベルリン日独センターは、ケルン大学との協力のもと、共通の関心事を取り上げる日独対話を継続し、日独の学生と研究者間のモビリティを支援することに合意した。

2012年10月18日 ベルリンにて